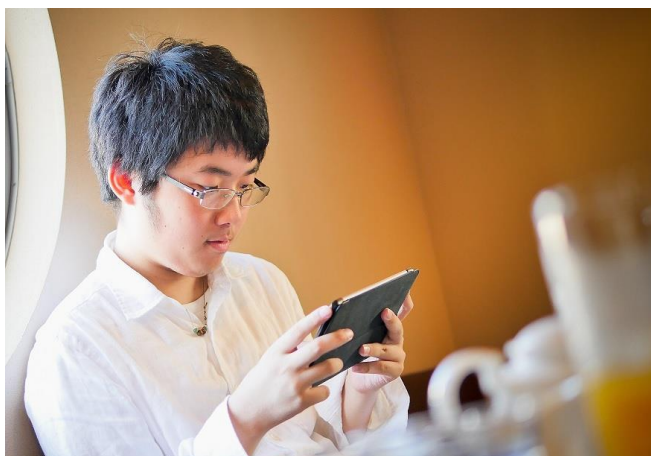


テクノロジーと配慮で普通学級の扉を開く

テクノロジーと学校の配慮が整うことで、学校に通学することができなかった生徒が普通学級で授業を受け、学ぶ楽しさを実感することができる。

神奈川県公立高校に通う金坂律(かねさか・りつ)さん(17歳)は、「集団授業に参加できることは、教室で座っているだけでどんどん知識が入ってくる。こんなに楽しいことはない」と嬉しそうに語る。

律さんは、文字を書くことが困難な書字障害と、視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚などの感覚に関わる障害がある。律さんは、それぞれがとても敏感だったりするのだ。書字障害で、「書かない」ではなく「書けない」という症状をなかなか理解してもらえなかったり、聴覚や視覚が敏感なことでのぎやかな場所にいるのが辛かったり、味覚がとても敏感なため給食が大きなストレスになったりすることから、小学校、中学校では特別支援学級に在籍していたが、通学することが難しくなっていた。



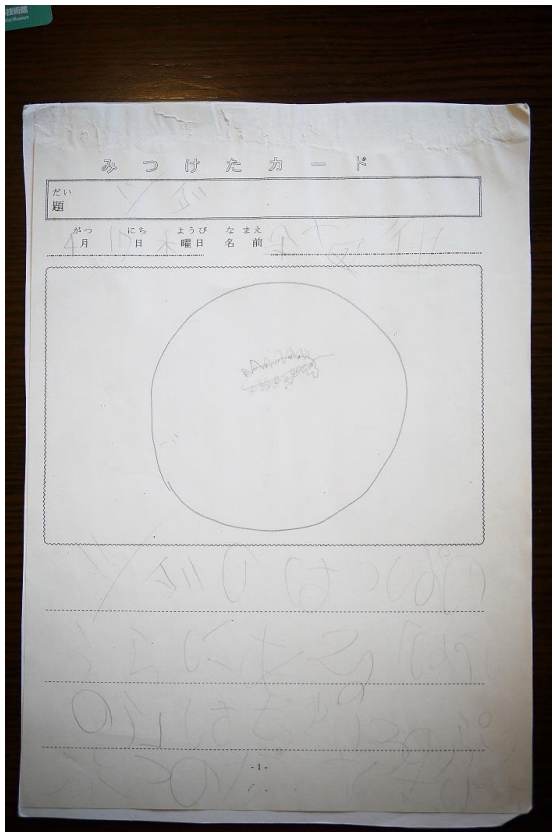
タブレット PC で考えをアウトプットすることが体調維持につながっている

■ キーボードとの出会い

読むことはできるが書くことができない。律さんは小学1年生のときに書字の困難があることがわかった。それでも小学1~2年生くらいまでは、考えをアウトプットする方法が口頭のことが多く、書く文字も少なかったためあまり問題がなかったが、小学3年生からは考えをアウトプットする表現により「書く」ことが求められるようになり、考えをアウトプットすることが追いつかなくなった。書けないことは大きなハンデとなったが、父親が「書けないんだったら打てば？ここにキーボードあるから」と言ってくれたことでキーボードと出会った。

ローマ字もまだ知らなかったが、「書く」をキーボードで代用するために、ローマ字を覚え、入力するスピードを身につけていった。

また、マインドマップアプリにも出会い、考えを次々にメモしていき、それを階層的に整理して、考えをまとめるために役立てていった。様々な工夫を試し続け、書くことができなくても、律さんの考えをアウトプットするツールと方法を確立していった。



小学6年生当時の理科の「シダ」についてのプリント

■ 公立高校受験の挑戦

小・中学校の9年間は、大勢の子供たちがいる場所ではストレスからくる健忘があったり、パニックを起こしていたために、普通学級ではなく特別支援学級を希望して在籍していたが、知識を得ることが好きで、算数・数学も得意だった律さんには、学習のペースが合わないと感じるようになり、感覚の障碍のこともあり小学3年生のころからはほとんど学校に行かなくなった。中学校では自宅で勉強し、テストは筆記が難しいことからワープロで受けることが認められたため、ノートパソコンを持ち込んで、ノートパソコンに解答を入力してテストを受けた。

高校進学については、中学校までと同じように在籍するだけになるかもしれないという不安が大きかったが、自宅から通学できる範囲に大好きな数学を深く学べる公立高校があり、公立高校の理数科を受験した。

高校受験では、中学校でパソコンでテストを受けていた実績もあり、パソコンと代筆を併用した受験が認められ、以下のような配慮がなされた。

- ・ 他の受験生とは別室での受験
- ・ 他の受験生で混み合う時間を避け、早めに教室に入ること、遅めに退出することの許可
- ・ 試験問題は通常の紙の試験問題が提供され、解答はパソコンに入力するか、代筆で実施（律さんが口頭で解答を言い、試験官が解答用紙に代筆する）
- ・ 見通しがわかるように、試験予定を紙で提示

またパソコンはマス目に一つずつの解答がしやすい表計算ソフトの Excel を使用し、下記の機能を制限した。

- ・ 自動計算機能をオフにする
- ・ スペルチェッカーをオフにする
- ・ 関数なども閲覧・挿入できないようにする
- ・ インターネットの利用を不可

律さんの特性に合わせ、パソコンの使用は認められつつも、パソコンを使用することによる不正が起こらないようにした受験方法だった。

■ 普通学級で授業を受けるための配慮

高校に合格してから入学するまでの間に、律さんの通学に際して必要な配慮についての話し合いが始まった。それは、これまでとは全く違う視点だった。

校長をはじめ副校長、教頭、担任、担当、各専科の教諭 6 名がチームを組み、律さんが自身の特性について書いているブログを事前に読み、調べられることは事前に調べ、その上で配慮の方法を考え、当たっているか否かの意見を問われるという、「どうしたら律さんの特性にあわせて学びを実現できるか」という視点だった。そこには「前例がない」「通常の方法はこうなので同じようにして欲しい」という考えは全くなかった。その考え方は入学後も継続され、今でも毎日保護者と担当の教諭との情報交換が行われ、トラブルがある場合は対応を行っている。

また、それらの情報は学校内で一つの場所に蓄積され共有されることにより、日々起きる事柄に対して「この方法ではどうでしょう」という発展的なやりとりとなり、「これは OK」「これならば OK」と配慮の方法が増えていった。下記がこれまで高校で認められ、行われてきた配慮である。

- ・ 授業へのタブレット PC の持ち込み
 - 紙のノートの代わりとして、タブレット PC を持ち込み、デジタルノートアプリなどでノートをとる
 - 数式は、授業中のノートは LaTeX という数式を書くための書式で書き、定期試験では Word の数式エディターを使用
 - 文章は階層的にメモをとってから文章化
- ・ プリントの課題は教科によっては電子データをメールで受け取る・質問や宿題は教科担当教諭とメールでやりとりする
- ・ 教室の一番後ろ、一番扉の近くの席が用意され、辛くなったら自分の判断で用意されているクールダウンルームに行くことができる
- ・ 特性により実施が難しい授業内容は、その都度できる方法を検討する
 - 音楽では一人で使える楽器を使う、試薬などで嗅覚ストレスのある実験は実験室ではなく廊下に顕微鏡を持ち出して観察するなど
- ・ 感覚過敏のため制服の着用が難しく、私服での通学を認められる
- ・ お昼休みは隣接している公園で保護者と昼食をとり休憩する
- ・ 全生徒、保護者に、律さんが受けている配慮について説明がされる

同じクラスの生徒だけでなく、他の学年を含めた学内全生徒への説明があることは、律さんにとって安心感が得られるようだ。「知ってもらうことってすごく重要ですよね。」と律さんは語る。

タブレットでノートを取っていても、制服を着ていなくても誰も何も言わない、クラス替えも怖くない、自分の特性を知ってもらっていることで誰と話してもフラットに話ができて、人間関係がとても楽になったと感じている。律さんは会話をした相手でもその人を記憶していることが難しいが、その理由を理解してもらっているとわかっていることで、安心して誰とでも話すことができるようだ。

今一番楽しいことは「授業」と語る律さん。通常学級に在籍することが難しく、特別支援学級に登校することも困難だった律さんが語る言葉は、教育に関わる全ての人にとって、希望の言葉であると同時に、考え続けていく課題でもあるだろう。



今一番楽しいことは「授業」と語る律さん

(年齢等は取材当時のものです)